



# 留学生の履修者が多い 学部授業についての考察

若井 知草

Chigusa WAKAI

外国語学部日本語・日本語教育学科専任講師



## 1. はじめに

現在筆者が本学で担当している授業には、留学生だけが履修している授業、日本人学生だけが履修している授業、留学生と日本人学生がともに履修している授業の三つのパターンがある。まず、留学生だけが履修している授業とは、日本語教育センター（「留学生別科」や「JALP」とも呼ぶ）において担当しているものである。次に、日本人学生だけが履修している授業は、他学科（年によって担当する学科は異なる）の「表現演習Ⅰ」「表現演習Ⅱ」のみである。最後に、留学生と日本人学生がともに履修している授業は、日本語・日本語教育学科の専門科

目やゼミ、全学科の学生が選択することができる基礎教育科目等であり、筆者の担当科目の中で最も多いのがこのパターンであり、年度によっては日本人学生より留学生の履修者の方が多い科目もある。そのような授業においては、いかに留学生の力を引き出すか、また、留学生にとっても日本人学生にとっても最大限メリットのある授業方法はどのようなものかということが大きな課題であると考えている。

## 2. 日本語・日本語教育学科の留学生について

日本語・日本語教育学科には、多くの留学生が在籍し

ているが、一口に留学生と言っても、日本国内の日本語学校を経て日本留学試験と本学の入学試験を受けて一年次から入学する学生や、日本国内の専門学校や短期大学や母国の大学等を卒業して三年次から編入する学生、本学が学生交流協定を結んでいる外国の大学から来る交換留学生（三年次から一年間ないし半年間本学科に在籍する交換留学生と、三年次と四年次の二年間を目白大学で過ごすDD（ダブルディグリーの略）生、つまり二重学位を修める留学生がいる）と様々である。

一年次から日本語・日本語教育学科に入学する留学生の定員は、学科定員40名のうち若干名である。平成28年度は、日本語・日本語教育学科に外部から入学した留学生が3名、日本語教育センター（留学生別科、JALP）からの内部推薦者が2名であった。

新宿キャンパスの全12学科を合わせても、平成28年度に一年次から本学に入学した留学生は9名しかいない。学科別にみると、日本語・日本語教育学科に5名、社会情報学科に1名、メディア表現学科に2名、経営学科に1名（日本語教育センターからの内部推薦者）が入学している。つまり、学外からの入学者は全12学科で6名しかいない。新宿キャンパスの全12学科への入学者が約1,200名であることを考えれば、一年次から本学に入学してくる留学生は、決して多いとは言えないだろう。

一方、交換留学生は、平成28年度春学期には、韓国、中国、台湾の16大学から45名（そのうち6名がDD生）を受け入れている。国別に見ると韓国35名、中国と台湾が2名ずつである。秋学期には33名、そのうち韓国20名、中国8名、台湾3名、イギリス2名を受け入れている。

ただし、交換留学生は全員が学部の授業を受けているわけではなく、入学時に日本語教育センター（留学生別科、JALP）で行われるプレイスメントテストを受け、各自の日本語能力のレベルに応じてJALPの授業だけを受ける学生、JALPと学部の授業の両方を受ける学生、学部の授業だけを受ける学生に分けられている。

### 3 留学生の授業に対する認識

授業を改善していく上で、まず、学生が現行の授業に対してどのような認識を持っているかということは、担当教員としては知っておかなければならないだろう。そのため、次の二つのアンケート調査の結果を参考にした。

まず、本学が毎学期行っている「学生による授業評価アンケート」であるが、このアンケートは無記名であるためにどの学生がどのような評価をしたのかは不明であり、もちろん留学生と日本人学生の区別もされていないため、留学生たちが授業に対してどのような認識を持っているのか、また、日本人学生と留学生ではどのような認識の違いがあるのか、などということとはわからない。わずかな手がかりとして、学生が書いた原文のまま活字化されている「授業の良かった点」「授業の改善すべき点」についてのコメントを読むと、日本語ネイティブが書いたのではないと思われる文法の間違い（例えば、「よかったです」や「いいだと思います」など）やあまり自然ではないニュアンスの表現から、留学生が書いたものではないかと推測できる記述がある。その中で目につくのが、「もっと先生の講義が聴きたいです。」という類のものである。おそらく、グループ活動や発表が多い授業よりも、教員が一人で話す形式の授業を望んでいるのではないだろうか。留学生と話していると、会話の中で授業を「聴く」という表現をよく使っていることから、授業は先生の話聴くものであるという認識が強いのではないかということがうかがえる。

次に、本学の留学生のサポートをしている国際交流課に問い合わせたところ、近年はしばらく実施していないが、平成22年度に帰国前の交換留学生を対象にした「交換留学生アンケート」というものがあることがわかった。そのアンケートの質問項目は以下の5つであった。

#### ① 授業について

1年間で履修した授業の中で来学期に来る学生に勧めの授業は？（授業科目と理由）

#### ② 携帯について

携帯は、どこの携帯がお勧めですか？（会社名と理

由)

③ 国際交流センターについて

国際交流センターで何かやってほしいことを教えてください。

④ 寮に入って良かったこと、不便だったことを教えてください。

⑤ なんでもいいので、言いたいこと

上記のうち、①の「授業について」の回答から何か授業改善のヒントが得られるのではないかと考えたのだが、回答数が15名と少なかったこともあり、お薦めの授業に特に顕著な傾向が見られるわけではなかった。お薦めの理由についても、「先生が優しい」「面白い」などの記述にとどまっており、そこに日本人学生とは異なる留学生特有の意識が表れているとは思われなかった。

以上をまとめると、現時点では、学部授業を受けている留学生が授業に対してどのような認識を持っているかということについての有効な調査結果はない。もちろん、筆者自身の授業における毎時のリアクションペーパーや学期末に授業に対する感想等を記述してもらったものなどは数多くあるのだが、学生たちが、自分の成績を決定する立ち場にある教員に対してどこまで本音を書くことができているかは疑問であり、これについては今後引き続き調査方法を検討していくこととする。

## 4 授業やゼミでの取り組み

筆者の担当している留学生の履修者が多い科目の中から、「日本語学習支援論」と、「現代文化と日本語」の二つを取り上げ、授業の中で工夫していることについて述べる。

春学期に開講している「日本語学習支援論」という授業は、年によって多少異なるが、留学生と日本人学生がほぼ半数ずつ履修していることが多い。平成28年度では、履修者約90名のうち40名以上が留学生であった。この授業では、留学生と日本人学生がペアで隣同士に座るように指示した。こちらが何も指示しなければ、教室の前半分に留学生、後ろ半分に日本人学生と、留学生同

士、日本人同士がかたまって座っていることが常である。ペアは教員が決めるのではなく、学生同士がお互いに声をかけあって組むこと、しかも毎回違う相手と組むことを提案し、ペアで課題に取り組んだり、日本語学習者を知るという動機づけの後、日本人学生が留学生にインタビューをしたりするようにしている。これについて、日本人学生からは、「留学生たちの日本語力の高さに驚いた。自分も頑張らなければならないと思った。」「もっと相手の国のことを知りたいと思った。」という感想や、留学生からは「日本人の学生が優しく話を聞いてくれてありがたかった。」「自分が思っていたよりも日本人が韓国に興味があることがわかってうれしかった。」などの声が聞かれる。しかしながら、授業終了時に「来週もペアで座りましょう」と指示しても、翌週教室に入ってみると、また日本人同士、留学生同士でかたまって座っていることが多く、前週の学生たちの肯定的な意見は本音ではなかったのかと思い座席指定をやめてみると、今度は「なぜペアをやめたのか。また留学生（あるいは日本人）と話したい。」という要望が、留学生からも日本人学生からも噴出する。つまり、交流したい、協働したいといったニーズは双方の学生たちの中に確かにあり、教員がわざわざ指示する意義もあるということであろう。学生たちの様子を見てみると、授業開始後しばらくは、相手のことを「韓国人」「中国人」「日本人」としてとらえていても、たくさんの相手に関わっていくうちに、少しずつではあるが、同じ国の人でも一人ひとり個性を持った違う人なのだという当たり前のことに気がつき、気が合う相手もいれば、それほどでもない相手もいて、それが自然なことなのだと実感できるようになっていくのがわかる。国際交流を進めていく上で、個人を知ることとは非常に重要なことであると筆者は考えている。たとえインターネットの中にあふれるお互いの国や人を侮辱するような悪意に満ちたネガティブな言葉を目にしようとも、自分が実際に知っている「○○さん」の顔を思い浮かべれば、冷静な判断力を保つことができと思うからである。

秋学期に開講している「現代文化と日本語」では、日本語・日本語教育学科だけでなく、全学科の学生が履修していることから、さらに交流にダイナミックさが増

す。学科別にみると、平成28年度は履修者127名のうち最も多いのが日本語・日本語教育学科26名（そのうち20名が留学生）、次に児童教育学科25名、人間福祉学科20名、韓国語学科19名と続く。他学科の学生たちは、普段の授業の中で留学生と接触する機会がほとんどなく、「目白大学にこんなにたくさん留学生がいるなんて今まで知らなかった」と驚く学生が多い。一方、留学生からは、「日本語・日本語教育学科の学生とは違ういろいろな専門分野について学んでいる学生の話が聞けて面白い」という感想があった。この授業では、挙手して発言するなどの積極的な授業への参加行為をポイント制と称して平常点に加算するなど、自分からアピールしなければ成績が上がらないような仕組みにしている。例年、抜群の積極性で授業を盛り上げてくれるのが児童教育学科の学生たちと、それを見て触発される留学生たちであり、回を追うごとに他学科の学生たちも自然に挙手して発言するようになっていき、非常に活気のある授業になっている。また、学科ごとのリーダーや発表のグループごとのリーダーなどの「リーダー」と名のつく役を設定している。その目的は、授業中の活動に対する責任感をわかりやすく示してもらうためだったのが、近年はリーダー役を設ける必要はないのではないかと考えている。

平成28年11月18日の読売新聞では、立教大学経営学部の「ビジネス・リーダーシップ・プログラム（BLP）」の授業が記事に取り上げられている。その記事によれば、立教大学は2006年度にBLPを始め、当初は権限やカリスマ性に基づくリーダーシップを想定していたが、開講前に担当教員が米国の大学などを視察した際、「権限なきリーダーシップの育成」が主流となっていることがわかり、これを掲げることになったということである。

つまり、わざわざ誰がリーダーということを決めなくても、一人一人が自分で考え、主体的に組織を動かすことができるということが重要なのである。次年度は筆者の授業でもそのレベルを目指していきたい。

最後に、ゼミでの取り組みについて述べる。ゼミは他の授業より少人数であるために学生同士の人間関係が深まりやすいことや、活動の自由度が大きいことなどから、留学生、日本人学生の双方にとって、様々な影響を

与え合える豊かな学びの可能性を秘めていると思われる。三年次、四年次を目白大学で過ごすDD生（デュアルディグリー、二重学位）のうち、韓国人留学生は日本語・日本語教育学科のゼミに、中国・台湾人留学生は中国語学科のゼミに入るのが慣例となっている。筆者のゼミには例年数名の留学生が入る。毎週の通常の授業の他に、留学生たちに各自の個性や能力を発揮してもらう場を設けるため、留学生たちの国の料理（韓国のチヂミ、トッポギ、ホットクなど）を一緒に作ったり、SPISチャレンジ制度に応募したり、桐和祭へ出展するなどの取り組みをしている。SPISチャレンジ制度については、『人と教育 第10号』に記載したので省略するが、平成28年度の桐和祭では、地域の人々、特に子どもたちとの交流を目的として、日本の昔遊び（百人一首、ことわざかるた、けんだま、だるま落とし、糸でんわ、輪投げ、折り紙、お手玉、ヨーヨーつりなど）と韓国の昔遊びができるイベントを企画した。ゼミの留学生たちが、留学生会や他のサークルの催しにも参加しなければならなかったため、二日間開催された桐和祭のうちの一日しか出展できなかったが、それでも30名以上の地域のお子さんたちの来場があり、大盛況であった。普段の留学生たちは、留学生寮に住み、授業では大勢の同胞の仲間に囲まれ、アルバイト先も留学生の友人同士で同じ職場に勤務していることがある。彼らにとって、大学以外の



図1 目白大学桐和祭。平成28年10月22日。地域のお子さんたちと「ことわざかるた」をするゼミの学生たち。





図2 お子さんたちの対応をするゼミの学生。

地域の人々との生のふれあいは、自分たちの持っている力で人を喜ばせることができることに気がついたり、自分が留学している意味を改めて考えるのにいいきっかけになっているようである。

## 5 おわりに

本稿では、留学生の履修者が多い学部の授業について、授業改善の手がかりをさぐり、また現状として取り組んでいることの一例を挙げた。今後も留学生が多く履修してくれることを想定し、留学生と日本人学生が同席していることの利点を生かした授業ができるように工夫していきたい。